

## ごあいさつ

「ペットの皮膚科」は文字通り皮膚病の専門病院です。皮膚病は耳の痒みとともに、犬や猫にとっても多い病気としてペットやペットオーナー様を悩ませています。その多くは慢性で長い付き合いの病気となっています。当院ではできるだけお薬の量を減らしたり安全性の高い治療を心がけています。そのためには薬など体の内側からの治療に加え、スキンケアなどの体の外側からのケアも併用することでお薬の量や間隔を空け、より安全な治療を目指しています。ぜひご相談ください。

院長 岩崎 利郎

- 1974年 東京農工大学卒業  
神戸大学皮膚科研究生  
神戸市平尾獣医科勤務
- 1978年 東京大学家畜内科研究生
- 1980年 第一製薬研究所勤務
- 1984年 農学博士(東京大学)
- 1991年 スタンフォード大学医学部皮膚科  
ポスドクトラルフェロー
- 1992年 ノースウエスタン大学医学部皮膚科  
アシスタントプロフェッサー
- 1994年 岐阜大学家畜病院助教授、教授
- 1999年 東京農工大学獣医内科学教授
- 2013年 北摂ベツセンターVetDerm Osakaで  
皮膚科二次紹介診療  
英ウィメンズクリニック勤務  
この間、日本獣医皮膚科学会会長、アジア獣医皮膚科  
専門医協会会長、第6回世界獣医皮膚科学会議(香港)  
大会長、アジア獣医専門医機構会長を務める

# ペットの皮膚科



〒658-0023 兵庫県神戸市東灘区深江浜町59-5  
カインズ ペッツワン神戸深江浜店2階

予約不要：TEL.078-414-8785

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
10:00~ 17:30	○	/	/	○	/	○	○

診療科目：皮膚科、皮膚科二次 診療  
<https://www.petskinclinic.jp>  
iwasaki@petskinclinic.jp



ぼくたちだって、お肌は大切

Pet Skin Clinic  
ペットの皮膚科

お薬をなるべく少なくし  
安全性の高い治療を

## 犬と猫のアトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎は若い犬にも猫にもよく見られる、とても痒い皮膚病の代表格です。

あまり年齢を重ねてから突然痒くなるのは、ほかの皮膚病を先に疑います。また、耳が痒いという症状だけが若い頃からみられるときもアトピー性皮膚炎の可能性があります。感染症を伴うことも多いので、細菌感染症やマラセチアなどがあれば、先に治療をします。

### 犬の場合

若い頃から前足の先を舐めていませんか？目の周りや口の周りが赤くないですか？耳が痒いということはありませんか？

アトピー性皮膚炎は若い時に発症して、長い間症状が続くことが多い皮膚病ですので、痒みが少なく、しかも長期間にわたる安全な治療が必要です。

そのためには内服薬や減感作療法(注射)による治療だけではなく、環境や食べ物にも気を配り、適切なスキンケアをすることがとても大切です。スキンケアを十分行うことでお薬を減らすことができれば、長期にわたり、より安全で快適な治療が可能になります。

### 猫の場合

首の周りを後ろ足で掻いてケガをしていませんか？舐めてお腹の毛がなくなっていますか？太ももの後ろの毛が抜けていませんか？

猫ではスキンケアは簡単ではありませんのでお薬による治療が主体になります。猫のアトピー性皮膚炎では、内服薬は長期にわたる安全性が高く、多くの場合痒みをコントロールできるでしょう。

## アレルギー性皮膚炎

アレルギー性皮膚炎は以下のアレルギー症状が代表的です。

- アトピー性皮膚炎とフードの成分によるアレルギー
- ノミによるアレルギー

アレルギー性皮膚炎では痒みがある(犬では前足先や他の部分を舐めて赤くなる、後ろ足で強く掻く、など)のが最大の特徴です。

フードの成分やノミのように原因がわかれば症状を軽減することができますが、アトピー性皮膚炎が関連しているとそれだけでは完全に痒みが無くならないこともあります。

### • フードの成分が痒みの原因として疑われる場合

フードを痒みの出にくいものに変更して、痒みが減るかどうかを8週間観察します。もし痒みが少なくなるようでしたら痒みの出にくいフードに変更します。また、フード以外の食材は疑われるものを順番に与えて反応をみながら、食べられる食材を増やしていきます。

### • ノミが疑われる場合

一般的なノミの駆除を行い1ヶ月ほど観察します。

## 膿皮症・マラセチア性皮膚炎

この二つの感染症は原因も症状も異なりますが、代表的な非常によくみられる皮膚の感染症なので一緒に挙げました。

- 膿皮症は皮膚で細菌が増えること
- マラセチアは酵母菌が増えること

これらの細菌や酵母菌はもともと皮膚に常在している菌なので、皮膚の免疫や菌に対する防御作用が下がると、増えて悪影響を与えやすくなります。

しかし、この二つとも症状と皮膚の検査から診断は容易に行えます。また大抵の場合、治療もそんなに難しくはありません。しかし、これらが何度も繰り返されるときには、原因となっている元の病気(多くはアレルギー)を特定し、コントロールすることが必要で、完治が難しいこともあります。

### • 治療法

抗生物質、抗真菌剤などの薬と、細菌や真菌に効果のあるシャンプーやスキンケアを合わせて用います。

## スキンケア

動物でのスキンケアはほぼ全身が毛で覆われているため、人の頭髪のケアと似た感覚があるのかもしれませんが。

スキンケアは「正常な皮膚を保つ」のか、「皮膚病を少しでも改善させる」のかで治療の方法が違ってきます。

### 正常な皮膚を保つ

シャンプーをした後に保湿剤(リンスやトリートメントなど)で仕上げてください。

ドライヤーはタオルで十分水分を拭ってから、体に近づけすぎないように(体に片手を当てて熱くない距離で)して行います。

### 皮膚が弱い、乾燥しすぎている

- 皮膚のバリア機能(経表皮水分喪失量、TEWL)を測定してみましょう。
- 皮膚が弱い子の場合にはぬるま湯で洗うとかマイクロバブルを用いて洗浄剤を使わずに洗うのもよいでしょう。
- 皮膚のバリア機能は皮膚表面の脂成分と関係が深いので、脂症の子でも皮膚の脂を取りすぎないように、またシャンプーするとカサカサになるようでしたら積極的に保湿剤を使いましょう。

### 犬のスキンケアのポイント

犬ではセラミド、グリセリン、ハーブ、必須脂肪酸などが入ったクリーム、シャンプー、ポアオンなどが保湿作用があるとされています。もちろん人でもよく用いられる尿素、ヘパリン類似物質、ワセリンなども効果大ですが、その子にとって使いやすいタイプを選ぶことが大事です。

犬のアトピー性皮膚炎では皮膚のセラミドが減少していますので、セラミドを含有しているクリーム、フォーム、リンス、トリートメントなどを積極的に使って参ります。